

古典への導入に配慮した現代文の教材の選定

——様々な文体にふれさせること——

長瀬 瑞己

時代認識の必要性

国語力の低下が叫ばれはじめてから久しい。しかし、学校で国語を担当する者として忘れてならないことは、戦後世代の学力が一樣に低下したわけではないということである。不用意な慨嘆は（を免すれば）、いたずらに生徒の出鼻をくじき、その向学心を傷つけることになるだけである。注意すべきは、一昔前までは漢文訓読調の文体がよく普通に使われていたということである。「…せずんばあらず」「…せるものごとし」といった口調が、公文書や一部の単行本は言うに及ばず、新聞・ラジオに至るまで普通に通用していた。そうした口調にほとんど接したことのないのが戦後世代である。教える側としては、このあたりまえの事実をよくわきまえておくべきだろう。こうした漢文訓読調の文体にどれほど接しているかということが、本物の漢

文を学ぼうとする時、決定的な重味を持つからである。高校の現場では往々にして体験することであるが、漢文はおろか書き下し文を先に提示しても意味がわからないという生徒が数多く存在するのである。「あに…や」「いはんや…をや」「…をして…しむ」等の表現は、生徒にとっては初耳なのである。これを構文・訓読・意味と順に説明するのはかなりの時間を要するし、一旦は理解させたにしても、そのような言い回しに接したのは初めてなので、何度もくり返し復唱しない限り身に付かない。つまり、終戦直後からいまでにも心ついた人間なら自然に身に付けていた漢文訓読調の文体の素養が欠けているのである。

以上のような点を考慮して、漢文脈の文体のものを二・三とり入れて編輯してみたのが以下に示す現代文の教材である⁽¹⁾。対象は高校三年生で、週二時間、通年（実質、一月中旬授業終了）二単位である。全体の目次が上段で、この

うち「歴史を追体験する」と題して、幕末〜明治という時代の香気を諸資料によって感得させようという目標の下に比較的興味深い当時の聞き書き等を集めた第六章の内容を次項に示した。

第一学期（省略）

……………

四、大人になるということ

人恋しさ？「下校拒否」：日本経済新聞・夕刊より

指示待ち世代、先生の卵も：ク

非行の心理：土居健郎『「甘え」雑考』弘文堂

五、社会の見取図として経済学

世界経済の現状：伊東光晴

『科学技術の開発と新しい社会』岩波書店

本邦における金本位制導入の経緯：吉野俊彦

市民大学・『円とドル』日本放送出版協会

六、歴史を追体験する

幕末から明治へ：次項目次参照

七、明治の海外体験

私の個人主義：夏目漱石『夏目漱石全集』岩波書店

夢十夜（うち、第一夜・第七夜の二章）

夢と精神分析：宮城音弥『夢』岩波新書

第三学期（省略）

……………

歴史を追体験する 幕末から明治へ

一、幕末の士族社会：…塾・天狗党

山川菊栄『武家の女性』岩波文庫

二、代官と富農：…御用金の上納

渋沢栄一『雨夜譚』岩波文庫

三、太平洋航路の時代：…ゴールドラッシュとカリフォル

ニアクリッパー

服部之総『黒船前後・志士と経済』岩波文庫

四、生麦事件：…事件の具体的経過・開戦はありえたか

アーネスト・サトウ『一外交官の見た明治維新』岩

波文庫

五、江戸無血開城：…薩摩屋敷での談判

勝海舟『水川清話』角川文庫

六、江戸の治安：…彰義隊

東京日々新聞社会部編『戊辰物語』岩波文庫

七、武士たちの行方：…会津藩の陸奥移封・草創期の陸軍

柴五郎『ある明治人の記録』中公新書

八、明治の産業・労働・賃金：…下女・機織工女・出稼

横山源之助『日本の下層社会』岩波文庫

九、明治・大正・昭和の諸物価一覧

小木新造『ある明治人の生活史』中公新書

十、富国強兵への道……日露戦争と日本海々戦

司馬遼太郎『坂の上の雲』文春文庫

十一、近代化の息苦しさ……「バスに乗り遅れた人」の明

治観

石川啄木「きれぎれに浮んだ感じと回想」『石川啄

木全集』筑摩書房

このうち漢文訓読調の文体のものは、吉野俊彦氏の文中に引用されている明治帝と松方正義のやりとりの部分、更に下段の第七・八章で採りあげた『ある明治人の記録』と『日本の下層社会』である。前者は、会津に生まれ戊辰の混乱を経て後に陸軍大将となった柴五郎氏の晩年の回想録、後者は、今日の語をもつていえば明治の労働界のルポルタージュ（記録文学）ともいべきものである。いずれもさわりの数頁を採り、簡単な読解問題と日本史の常識を問う問題、それに漢字の読みを確認するプリントを添付して授業を進めるといふ形態である。以下に教材本文の一部を順に抜粋する。

ここに非常に面白いエピソードがあります。それは松

方の伝記にはっきり書いてあるのですが、明治天皇に、日本は金本位制度を採用して世界経済の仲間入りをしなければいけないという意見書を出したときに、陛下はそれをお読みになったけれども、よくわからない。そこで侍従の岩倉具定^{いわた}を松方の家に派遣して次のような勅語を賜りました。

「朕ハ卿（あなたの意）カ理由書ヲ閲セリ（よく読んで）ト雖モ、之ヲ諒解スルコト頗ル難シ（むずかしくてよくわからない）。然レトモ、従来卿カ事ニ当リテ其ノ成功ヲ見サルハナシ。故ニ今、卿カ奏請スル所モ、亦卿ニ信頼シテ之ヲ裁可スヘシ。惟フニ幣制ノ改革タル、洵ニ難事ニ属ス。必ス大反對論者ノ多々アルコトヲ予期セサル可ラス。宜シク意ヲ爰ニ注キ、慎重以テ事ニ任セヨ」。

これに対して松方は感激して、次のような奉答文を奉ったことが伝記に載っています。

「臣不敏ナリト雖モ、厚ク恩遇ヲ賜ヒ、今ヤ内閣ノ首班トシテ……」

（25～26頁「明治三〇年における金本位制度の採用」）

会津落城後、飯炊き、下僕となりて浪々、ただひとす

じに自ら生活し得る道を求めて、あえぎあえぎ月日を送り、長岡宅にありしときは、近所の活版所文選工を募ると聞き赴きて交渉せるに、文字を知ること不充分なりとて落第す。また一ツ橋内の軍馬局にて蹄鉄工を募集すると聞き、手続きを問えるに、年齢不足にて失格す。

……

明治七年四月、二年生となる。成績はあいかわらず末尾にて、余の定席となれるがごとし。入学まで勉学の機会に恵まれざりしこと、結局は薩長策士のためなりなどと、甲斐なきことを考え、口惜しきことかぎりなく、性来の内気ますます内攻して意気消沈、ひがみ根性を生ず。さりとて、このままにては落伍のほかなし。「何かひとかどの修業をいたさねばふたたび家にもどりませぬ」と、田名部に父に別れの挨拶せること思い出しては、ただ我武者羅に勉学のほかなしと覚悟す。

(97頁「わが生涯最良の日」、107頁「国軍草創の時代」)

ただに都会のみならず近年地方においても下女^{まっぴん}払底の声を聞くこと頻^{しきり}なり。最も給金よしと称せられ、下女社会に喜ばるる宿屋の如きも出代^{でかぢ}の期に及べば下女を得ること頗^たる難^かく、以前は坐して下女の来り頼めるを見たり

といえども、今日は予め一ト月以前より次の下女を探し置かざるべからず。なおかつ約束期中逃げ去らるる憂あり。これを下女使う人たちの言によれば、当節の下女はどうもならぬ、エラがつて、畜生め、下女のくせにと吐^{はき}きおるなり。これ何故ぞ。

昨月末、余は伏木港より魚津に帰らんとして直江津便の汽船に乘れり。船中二、三十人の下女、……

(318頁「地方の下女払底」)

各教材間の相互連関・構成

以上、漢文に関係した章のみについて略述したが、この現代文の授業全体についても一言しておきたい。

「歴史を追体験する」の章の教科(国語)としての主眼は最終章の啄木のエッセーの読解である。啄木の文明批評は短いながらも鋭い時代考察を含んでいるために、よく教科書にも採られるものであるが、いざ講義するとなると、なかなか困難である。それも当然で、明治という時代をある程度実感できていなければ、いくら教師が自分の蘊蓄を傾けても、聴く側は何のことやらわからない。あの先生は「サヨク」なのかといった印象を抱かせるくらいのことですら終わってしまう。そうした点を考慮して第一章から第十章

をいわば注として加えたことである。但し日本史の資料集に墮することのないよう、実体験を基に肉声で書かれたもので、しかも歴史の本流にかかわって来るような興味深い事実、それもあまり一般に知られていないような意外なものを意識的に集めるよう努めたつもりである。

更にこの「歴史を追体験する」の章は、実はその前の「社会の見取図としての経済学」とつながっている。技術革新に伴う経済社会の変動が、何よりも貿易と産業構造の組み換えをもたらすという点では、今も昔もかわりはないからである。現代の世界を考えるのに、より興味深い時代としての明治を意識させるような方向へと生徒の知的好奇心を誘導してみたいというのが、教える側としてのひそかなねらいでもある。その目的に沿って、横山源之助氏が描いた明治の女性労働力の大量移動の実態と吉野俊彦氏が描いている当時の経済政策の骨子とを、それとなく並置した。ここから浮かび上がって来る経済問題、なかならず貿易についての問題は、伊東光晴氏の指摘する現代資本主義社会の分析と基本的な面で呼応する部分がある。

以上が現実の社会を扱ったもので、これは次章「明治の海外体験」という心の問題を扱ったものへとつながる。漱石は啄木とはまた違った方向から、明治という時代をうけ

とめている。流行語を用いれば「モラトリアム人間論」の明治版とも言うべき内容が語られているのが「私の個人主義」の前半であり、それは明治の日本人というよりは近代人すべてが体験することになるであろう心の問題について、本格的にとりくんた恐らくは嚆矢である。漱石は百年ほど時代を先どりしていたとも言えよう。こうした漱石の精神世界は「夢十夜」のような小品により象徴的に描かれており、その解説のために心理学者の宮城音弥氏の『夢』を援用したものである。

この漱石が体験したような問題は今日では一般的なことがらとなり、社会学者から精神科医まで含めて、世代論やら日本人論が広汎に展開されているというのが現状であろう。こうした日本人論隆盛の契機をなし、またその考察の深さという点でも群を抜いているのが、土居健郎氏の「甘え」理論である。

ということ、この現代文の教材は、この「明治の海外体験」の章から、最初の「大人になるといこと」の章へとフィードバックすることになる。

教材「融合」の難しさ

「国語Ⅰ」「理科Ⅰ」「現代社会」のような、科目の総合

化という流れはどのような考え方から出て来たものであろうかと問うた時、各教科間の派閥意識とそこから生ずる過剰カリキュラムを少しでも和らげたいという気持ちがある根底に感じられるように思われる。その方策として選択制の強化と科目の総合化が出て来るのは当然のなりゆきで、それが教材の融合という流れを生んでいるかと思う。もともとこうした上からの指示のみで現場が変貌するとは思われない。生徒の学力低下に対応して、平易でしかもおもしろい授業を工夫していかねばならないという気持ちにかられている数多くの教師が融合教材ばかりを支えているように思われる。

しかしここで問題となるのは「融合」の解釈である。たいてい脈絡もないものどうしを抽象的なテーマでくくってみても、散漫に流れるのではなからうか。教材相互が有機的につながっていてこそ融合なのである。

もしも古典教育の目標を、教養としての古文・漢文の読解力を身に付けさせるということに限定するならば、内容の吟味にさほど心をくだく必要はない。それもひとつの考え方で、中途半端な「融合」教材を使つての授業よりは、この方がよほど意味がある。その際に工夫すべきは、入門から解釈に至る教授法ということになる。こうした考え方に

立てば、漢文脈につながる文体のものであれば何でもよいということになる。しかし、本現代文教材に採りあげた各文章については、あくまでもその内容にこだわった。それは以下のような考え方に基づくものである。

教材の吟味について

まず第一に、その思想内容について、世評の高い小説・評論等をそのまま国語の教材として採りあげていいものかどうかという問題がある。たとえば小林秀雄の評論であるが、よく教科書に採られる「無常といふこと」にしても、当時の、唯物史観による歴史解釈の隆盛ということを背景にして読むのでなければ、小林秀雄の史眼の新鮮さはわからない。社会問題に関心があり、なかならずマルクス流の歴史論議に半ば厭きたといった生徒であれば、あるいは非常な感銘を受けることもありうるかもしれないが、現実には、高校段階でそうした問題意識を抱いている者は今日では少数だろう。つまり授業の成否は、生徒の精神年齢・興味関心にどれだけ密着した教材を発見しうるかという一点にかかっているということなのである。

しかし一方教える側としても、自分で興味を持てるようなものでなくては、真に生徒をひきつける授業は不可能で

ある。実は、師弟兩サイドの興味が一致するような教材と
いうのは、いざ搜すとなると、なかなか無いのである。単
に内容的に優れており、講義する側も大いにその内容や筆
者を高く評価しているというものなら、現に教科書にあ
る。だが、生徒と問題意識を共有できるものとなると、極
端に淘汰されてしまうのである。

本現代文の教材では、この、生徒と問題意識を共有でき
るといふ部分が、第一章「大人になるといふこと」であ
り、それを契機として現代の経済社会の諸問題、更にはそ
の根元としての近代社会、あるいはそこに生きる人間の心
の問題へと進むように各教材を配列したつもりである。

但し、生徒に対する押しつけのような印象を与えぬよ
う、こうした方向付けをあまり強く前面に出すことは極力
避け、広い視野から自然に解説することを心がけた。これ
は漢文脈の三つの教材についても同様で、漢文の素読とい
う訓練の面は強調せず、とにかくおもしろいからついつい
ひきずられて読み進むという姿勢が大事であるとの考えか
ら、できるかぎり異聞に属するエピソードの類を捨ててみ
たのである。

結 び

ファーブル『昆虫記』の邦訳で知られる山田吉彦氏の自
伝につきのような一節がある。

このころおまいはいつもどこか病氣だった。医者は脚
氣だと言った。次の医者は肋膜炎と言った。次の医
者は肺が悪いと診断した。もう一人の医者は脚氣だと診
立てた。別の医者は脊髄が悪いと言った。

おまいは何たる体であるかと自分の体を呪い、気分が
滅入ったり高揚しすぎたりした。学校の漢文の時間に、
おまいは一つの氣に入った言葉を見つけた。

性に従う、これを道という。
天に随う、これを命という。

最初の句の後半は「これを善という」だったかも知れ
ない。いずれにしても究極には同じ意味になる。

これは唐か宋のせむしの植木屋の言である。植物はそ
の持つて生まれた自然の性質の線に従って育てたり工夫
したりする。これが道、あるいは善である。

その植物に定まっているものは天の命で人力のいかん
ともすべからざるものである。病氣の巢のように言われ
ているおまいは、そのように考えた。

そしておまいは小遣いに余裕ができると漢文の本を買
って読んだ。

(84~85頁)「中学のころ」⁽²⁾

戦後きだみのるの筆名で論壇に登場した氏は、また世俗を否定した自由人としても知られる。恐らくは、氏の束縛を嫌う気質は、柳宗元「種樹郭橐駝伝」に展開されている余計な干渉を排した養育という発想に深く共感するところがあったのであろう。やはり国語というのは、現代文に限らず古典も含めて、真に適切な教材を発見するという地道な努力が授業の成否の鍵を握っていると思われるのである。

現代文の中に様々な文体の文章を挿入し、古典にいきなり接する際の抵抗感を少しでもやわらげる、それも意識的にではなく極く自然に実践してみたいというのが、本現代文教材編輯の主旨である。漢文に限らず擬古文でも(たとえば柳田国男のもの等も)、もしも適切なものがあれば、一学期に一〜二本でも繰り入れていってみたいと考えている。

注

(1) このような思いは筆者だけのものではないようである。

加地 漢文の学習で、古典の文章から入っていくというのは本格派だと思います。しかし、今の高校進学率九三パーセントという状況の中で、古典から入るとするのは、私、非常

な疑問を感じるんです。この辺はいかがなんでしょうか？

……

鈴田 確かに今の教科書では漢文脈の文章を読ませるといことが少なくなっていますね。それがやはり漢文ざらいを生んでいるというか……。おっしゃるとおりだと思いますが、高校になると、やはり大学の入試がからんできて、あまり悠長なこともやっておれないという事情がある。

(中国古典と国語教育：対談：加地伸行・鈴田克介『国語科通信』一九八七・六六号・22頁、角川書店)
(2) きだみのる『人生逃亡者の記録』中公新書

※ 本教材は、昭和六十一年度、東京学芸大学附属高等学校大泉校舎第三学年(十一期生)で使用したものをもとに、翌六十二年大塚漢文学会の漢文教育シンポジウムで紹介したものの一部である。六十二年度に同校の第三学年に対して同じ教材を使用し、その際に一部修正を加えたため、学会発表時と一部相違していることを付け加えておきたい。

(東京学芸大学附属高等学校・大泉校舎)